

■（１３０）開票所で活躍の学生たち、記者の仕事はどう写ったか

自民党が圧勝した東京都議選で、応援取材を割り当てられた八王子市の開票所に入ると、昨年末の総選挙の際とは雰囲気が違っていた。開票作業のフロアに若者が約２００人。公務員には見えない。投票箱を運び、台に広げられた投票用紙を次々とそろえていた。

締め切り時間をにらみながら、候補者の得票数を本社に電話で急報するのが、開票所取材の役割だ。ぎりぎりの時間になると、候補者ごとに積まれた投票用紙の束を数えてでも当選か落選かを判断しなくてはならない。そのため、開票作業が遅れると、気持ちが焦ってくる。しかし、この夜は心配無用だった。若者らはきびきびと動き、開票は予定より早く終わった。市の選挙管理委員会も、終了後の場内放送で「感謝」を伝えたほどだった。

若者たちは、市とボランティア協定を結ぶ工科系大学の１年生だった。ほとんどは未成年で選挙権はまだない。多くの学生は、大学の期待した「票の重み」「選挙の重要性」を肌で感じ取ったに違いない。

大学のウェブサイトを見ると、全員がメディア学部生で、関連の技術開発やビジネスを学んでいくという。彼らは開票所で記者の行動も見たはずだ。何か提案はないだろうか。

（山）